

家族システム理論の母親面接への応用  
——入所治療における母親面接事例の考察——

本 多 修

(武庫川女子大学文学部教育学科人間関係コース)

An Application of Family Systems Theory to  
Mother Counseling From the Case of Mother Counseling  
on Residential Treatment

Osamu Honda

*Department of Human Relations, Faculty of Letters,  
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663, Japan*

The mother counseling on residential treatment of children has been considered through the case studies on the following 6 points of view.

(1)The residential treatment is a treatment that separates a child from his family for some time. They are the roots of his symptom or problem behavior. It demands therefore its own theory that is different from outpatient treatment theory.

(2)The residential treatment separates a child from his family and his home. It gives a child the field of a provisional growth, but also has the aim to go back the child to his home. This is paradoxical.

(3)A mother counseling develops from mental conflicts of the mother of a patient herself. The conflict is composed of her sense of guilt or self-reproach, and rage. The sense of guilt or self-reproach is derived from the sense of a bad mother who has abandoned her child. The rage is derived from the thought that her child makes her the bad mother.

(4)Under the conflicts, it makes out the undesirable condition of transference to have mothers take the individual psychotherapy that treat them patients.

(5)It is available that therapist cooperates with the mother considering genogram, and the life history of the patient and his mother herself. In this clinical work the concept of the Bowen. M. , multigeneration transmission process and the triangle, is employed.

(6)It is available that the therapist keeps some distance from transference, and that he does an objective and neutral therapeutic attitude. This therapeutic attitude has reduced the mother's anxiety, and given the change of family system. Bowen, M. explains that an interview only with the mother of a patient forms family systems therapy.

緒 言

情緒障害児短期治療施設(以下、情短と略記)の入所治療における母親面接について考えたい。情短は、約4半世紀の歴史をもち、全国で13施設を数えるのみであるが、それぞれ独自の実践を積み重ねてきている<sup>1)2)3)</sup>。

情短は「軽度の情緒障害児を短期間入所させて治療する」ということが趣旨である。ところが、軽度の障害であるならば外来治療で充分であり、家族からの分離による入所治療の必要性はないし、逆に入所治療の必要な軽度でない障害であれば、短期治療での改善は難しい。このような矛盾を常にかかえている。したがって入所対象児童は、軽度ではないが一応の集団生活が可能な児童で、家庭に居ることが症状や問題行動の改善よりは、悪化をもたらすと思われる児童である。つまり『家庭ではもうやれない』と判断される子どもということになる。そこには、家庭の養育機能の欠如と共に、親や家族の子どもに対する拒否感・拒絶感が内在している。

子どもは、症状や問題行動を表出することによって、自分自身の成長を一時的に停止させ、そうした犠牲を払ってまで、親や家族・地域を巻き込むことによってなんとか家族の一体性を守ろうとしている。しかしそれは、奏効しないまま家族の問題を背負った代表選手として入所してきている。家族療法の中で positive connotation(肯定的意味づけ)<sup>4)</sup>と言われる概念を用いると、子どもが症状や問題行動を表出する意味を上記のようにとらえることが出来る。入所治療の目標は、子どもと家族の双方が変化成長することによって、問題の発生源でもあった家族に退所(退院)していくことである。

入所治療は、子どもの家庭からの分離を基本とし、家族の拒否感を扱いつつ、その家族の元へ戻ることを目指すだけに、母親面接は家族療法でなければならない。Bowen, M. は家族システム論による家族療法の先駆者の一人であるが、家族成員全員に会わなくても、母親のみとの面接でも家族システム論の理論を用いて家族療法を行うことが出来るとしている<sup>5)6)</sup>。こうした考え方は、入所治療における母親面接や、従来の外来母子並行面接にも新たな有用性を提供することとなる。

本稿は、情短施設の入所治療における母親面接の事例を検討するのが目的であるが、Bowen, M. の家族システム論に従い、ジェノグラム(genogram 家系図)を重要視し、合わせて母親と子どもの連続した生育史を年代記としてまとめた。紙数の関係で母親面接の過程そのものは割愛した。

## 事例の概要

この事例の子どもは、家出徘徊を主な問題とする小学1年生の男児である。母親自身も自らの両親との間に強い葛藤があり、中学生以来不登校や神経症症状さらに家出を繰り返し、結婚・出産・離婚・再婚を経てきている。近隣からは、母親が子どもを虐待していると思われていた。入所治療期間は1年10ヵ月。母親面接はほぼ週1回1時間の割合で58回である。他に母方祖母との面接と夫婦同席面接を3回行っている。子どもの心理療法は、別の担当者が個人遊戯療法をおこなっている。入所後1ヵ月以降は、週末毎に家庭に外泊し、春夏冬の長期休暇の大半は家庭で過ごすシステムである。

- (1) 子ども：Y. A. 男児, 小学一年生, 入所時7才4ヵ月。(3月1日に入所, 翌々年12月25日に退所する。)
- (2) 主 訴：家出徘徊, 虚言, 金銭持ち出し, 登校渋り, 夜尿。
- (3) 臨床像：やせ型, メガネをかけ大人っぽい話し方をする。入所前のインテーク面接では、初めは入所を嫌っていたが訓練費(お小遣い)が貰えることを知ると眼を輝かせて「来たい」と言う。
- (4) 生育歴：出生時父親20才, 母親18才の時, 満期産。体重3150g。すぐに人工栄養。以後の体重増加は不良。始歩11ヵ月。初語は早かったと言う。(出生前後の状況は、母親と本児の年代記として後に詳しく述べる。)
- (5) 入所経過：小学校入学後、ゲームセンターへよく行き家からの金銭の持ち出しが頻発する。叱られると逃げて母方祖父母宅や母親の知人宅に行く。夏休み前より、青少年クリニックや公衆衛生研究所に通い少し落ちつく。2学期以降は、放課後も帰宅しなかったり、朝家を出ても登校しなかったりすることが多くなる。次子の誕生直後に約2万円を持ち出し使う。親は3度目のお灸をするが、深夜に家を出て母方祖父母宅や知人宅に行く。冬休み直前に児童相談所に来所した。3学期になると夜間徘徊が増え、保護願いを出している。登校しても学校から居なくなるので、こういう状態では学校に来させないでほしいと学校から言われる。
- (6) 家族構成：実母(以下Moと略記), 26才。

やせ型 メガネをかけている。整った服装をすると知的な印象も受けるが、10代のような服の時もある。

養父(以下sFa), 32才, Yとは養子縁組が出来ている。兄と一緒に製造業を自営。祖父の死後あとを継いでいる。若く見えるが堅実な考え方で仕事も熱心である。兄と共に働くが、sFaの方が経験が長く技術も

上である。兄を立てて兄弟仲はよい。

異兄弟 R, 生後 3 ヶ月,

父方祖母, 59 才, 祖母の住居の一階が工場であり, 祖母が集金, 経理を統括している。(母親面接日の Mo は, 朝 sFa の車で一緒に祖母宅に行き, R を預けて母親のみ来院した。R が 1 才半過ぎてからは, R を自転車に乗せて 40 分かけて来院した。)

母方祖父, 54 才, 自営業, 借金を抱えている。家出した長男とは絶縁状態のままである。昼は自営の仕事をし, 別に夜間業務にもついている。

母方祖母, 48 才, 糖尿病で入院中。医療費のこともあり, 祖父母は名目上偽装離婚している。

(7) Genogram (家系図): 母親面接の中で, Y 児とこの Mo を取り巻く家族のことを共に考えていく時, 家系図が非常に役立った。約 10 回の面接で下図の概要が明らかになった。

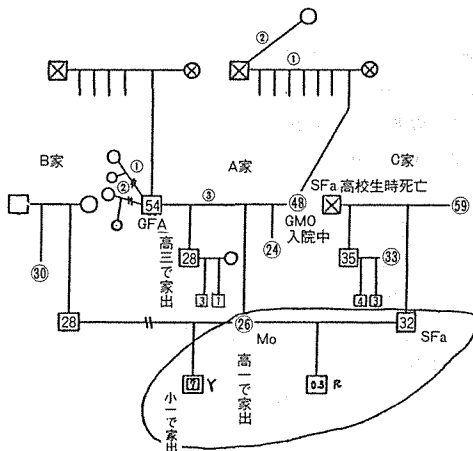


Fig. 1. The genogram of Y's extended family.

(8) 児童相談所の総合所見と方針: 新 K 式による知的評価は, 認知面  $DQ=138$ ,  $DA=9:11$ , 言語面  $DQ=111$ ,  $DA=8:0$  とかなりの差異があるが, 全検査  $DQ=122$ ,  $DA=8:9$  と良好な能力。バウムテストでは, 強い筆圧で左下隅に描く。潜在的には, エネルギーを秘めているのであろうが, 精神的発達のには知能年令を考慮しても未分化, 未熟で退行的である。樹冠内には葉がぎっしり描き込まれ, 自己の内的世界を強迫的に維持しようとしている。それだけに外界からの強い圧迫を感じとっているように窺える。愛情飢餓的な状態にあり, 問題行動も過補償的なものと思われる。特に実母に対するイメージが悪いが, 母子間に安定した共感的な関係が形成維持出来ていないことは, 生育史から容易に想像される。母親は勝気で責任感もあるが激しい気性で養父や親族への思惑もあり『いい子』を期待し, ロヤかましい接し方になっていた。就学時の担任が厳しい指導をする人であり学校生活の負担感も大きかったと思われる。現状では, 家庭から分離して母子への治療や, 生活指導も含めた再育児的な関わりが必要と思われ, 情短施設への措置が適当と史料する。

### 母親と Y の年代記

母親自身が面接場面で語った自らの生育史と Y の生育史を年代記として再構成した。Bowen, M.<sup>6)</sup> は, 主訴の歴史, 核家族や大家族の歴史のデータを収集することが Family Evaluation (家族評価) の重要なポイントであるとしている。母親と Y の年代記を面接の中からもとめることは, 両者を含む家族全体のシステムを明確にすることである。(＃は, Mo が語った面接回を示す。)

X1 年, Mo, A 家の第 2 子長女として生まれる。

Mo「小さい時から, 私だけ母親に庇ってもらえなかった。祖母が Y を庇うのを見ると腹が立つ。今も祖母に膝枕をして欲しい気持ちがある。」(＃13)

X12 年, 小 6, そろばんを習い始め 1 年間で 1 級になる。

Mo「みんなに奇跡やと言われた。将来そろばんの先生になろうと思った。父親が『商売するのにそれ以上はいらん』と言って辞めさせられた。」(#11)

X13年, 中1, 英語が好きで, 英語塾に行く。

Mo「英語の先生になりたいなあと思ったら, 父親に辞めさせられた」(#11)

X14年, 中2, テニス部で2年になり球が打てるようになると父親に辞めさせられる。

Mo「母親が病弱で, 家事と家業を手伝わされて, 部活動をさせてもらえなかった。」(#11)

X15年, 中3になる春休みから, ノイローゼ状態となる。対人恐怖, 不眠, うつ状態で成績も落ちる。

Mo「みんなが私の悪口を言っていると思った。人の中に入って行けなくなった。」(#11)

2学期の2ヵ月間は学校を休んでいる。

Mo「精神科に1回行ったけど, 薬が嫌いで効かないと思った。」(#5)

X16年, 公立高校普通科入学

Mo「ランク下げたけど, 普通科だったし, 中学時代の私を知っている人が一人も居ないと気づいたら, 180度人間が変わった。生徒会の役員をして生き生きしていた。普通科に行けたことで父親から解放されたと思った。」(#5)ところが, 兄(高3)は父親と喧嘩して家を出, 近所で自活して定時制に通うようになる。

Mo自身の高1の2学期, 父親はMoを単身東京の定時制高校に入れ, 東京の支店ということにして昼間は会社回りの営業の仕事をMoにさせた。

Mo「定時制だったけど, クラブで楽しく頑張ろうと思った。週1回父親が上京して, お金を置いていった。クラブで帰りが遅くなった日に, 父親が来ていてリップクリームを見つけ, 口紅と思って殴られた。」(#5)大阪に帰ろうと決心し, 1週間分のお金を持って鈍行に乗る。家には入れず, 東京に戻って友達のお紹介で製本会社に就職する。(10月) Mo「給料を盗られたし, 寮生活で残業が多かったし, 2ヵ月で疲れた。」(#5)

東京近県で八百屋兼薬局店にお手伝いとして住み込む。

Mo「冬休みだけでもということだったけど, 同年代の娘にいびられたし, 掃除, 洗濯, 風呂も全部した。大晦日に, 美空ひばりを見て, 母を思い出して泣いて, 電話した。」(#6)

X17年, Mo「正月3日に帰ったら, いきなり父親に殴られて, すぐに家を出ました。」(#6)この年には, 家を出る見つかる連れ戻される, 又家を出るを5回繰り返す。Mo「財布を落して交番に行くと, 捜索願が出ていると言われて捕まるとか, 連れ戻される途中で逃げ出すとかだった。」「早く子どもが出来れば寂しくない, 父親から独立出来ると思うようになった。」(#7)

X18年, 東京で19才の男性と仲よくなり, 妊娠する。

Mo「男性観など何もなかった。男性に期待もしてなかった。ただ赤ちゃんが持てるという期待感で一杯で, 幸せて, 不安も見通しも何もなかった。彼は, 留学詐欺にあったところで行き場がなかった。妊娠が解かってから, 私が就職先を捜したり履歴書を書いたりして, 彼を運送会社に就職させた。O市の両親に, 生むからと連絡して彼が20才になった時に婚姻届を出した。」(#7), 「妊娠5ヵ月ぐらいの時, 会社のアパートが火事になり, 夫の実家に身を寄せた。実家(B家)で食事をして, 夜寝るのは義姉のアパートに同居させてもらう。1ヵ月でいろいろ嫌なことがあった。家族の食事を作ったり, 義姉の洗濯もした。Yが生まれてから近くにアパートを借りた。」(#32), 「Yの出産は30分で生まれた。苦しい時にお母さんと叫んだと思う。1週間で母乳が出なくなった。本の通りにしなあかんと思っていた。姑と育て方の意見が合わなかった。5分ぐらいの所に姑が居て, 小姑にもいろいろいびられた。」(#7)

X19年11月, Yが1才になる誕生日の3日前に家を出る。Mo「別れる時も, あとさき考えないで大胆に今日出ようと朝決めました。離婚調停の時に夫に泣かれた。そんなに惚れられているのかと思ったけど…。1年前にYのことで電話をしたら, 『Yとお前を忘れるのに7年かかった』と言っていたから残虐なことをしたと思う。」「Yをアパートにお置いたまま, スナックに働きに出た。」(#12)12月にO市の祖母が上京してYをO市に連れて帰った。(#9)

X20年 6月7月, MoがYを引き取り保育所に入れる。8月に祖母が再びO市に連れて帰る。Mo「Yがその頃のことを『僕が赤ちゃんの時, 病気でやせて死にそうになっていたのを, おばあちゃんが迎えに来てくれて助かったんや』と言ったのでびっくりしました。」(#10)

X21年10月、Moはもう1度Yを連れ戻して夜だけの託児所のある店に勤める。12月に家財道具を全部売ってO市に戻る。Mo「祖母がYのことを心配して毎日のように電話してくる。祖母からYを取り上げて東京に連れていく毎に祖母が病気になる。Yを取り上げたらあかんと思って決心した。」(#9)

X22年、O市で昼は事務員として、夜はスナックで働く。Mo「昼の仕事と夜の仕事、全く違う自分でどちらが自分なのか解らなかつた。」(#11)Yは祖母が養育している。

X23年11月、アパートを借りて5才のYと一緒に住む。

X24年2月、祖母入院。Mo「Yを祖母から取り上げると、やっぱり祖母が病気になる。私なんかよりずっと祖母がYに愛情をかけていた。」(#9)、8月C(後のsF)と同棲を開始。Mo「主人は、付き合っている初めは子どもが嫌いと言っていた。私に子どもが居ることを知ってから主人は、悩んだと思う。Yと初めて会ってからYが人なつっこいので、主人の方が結婚しようと言いつつ出した。」(#3)、「地元のスナックの店を任されていたが、結婚するならやめてくれと主人に言われて辞めた。」(#11)、「主人の母親が、アパートのお金を出してくれ。」(#20)、「Yは『引っ越しを手伝いに来たお兄ちゃんがそのまま居るから変や思ってた』とあとで言っていた。」(#3)、10月Mo「保育所でYが『家にお兄ちゃんおる』と言うので、保育さんに『お兄ちゃん違うでしょ』と言われた。それでYが『ボクお父さん言うてもいいか?』と主人に聞いて、お父さんと呼ぶようになった。」(#20)

X25年4月、現在の家(新築テラスハウス)に引越す。母方祖父母宅から少し離れる。Yは小学校に入学。Moは次子の妊娠を知り非常に不安定になる。5月婚姻を届け、養子縁組もする。Mo「絶対生んだらYがひがむ、不良になる、生みたくない堕したと思ってた。主人は子どもの欲しくない人やと思ったし、欲しくないと言っていたのに、2年たって変わった。」(#21)、「Yは担任の女の先生にきつく叱られて、毎日のように居残りさせられていた。入学後の1週間でYが輪ゴムを他の子に投げ返して、担任に往復ビンタをされて4時間立たされたのが始まりだった。私がきつく叱ったら萎縮して何も言わなくなる。」(#23)、Yは帰宅が遅くなり、両親に叱られると3km離れた母方祖父母宅に、無賃乗車や他人の自転車に乗ったりして逃げる。家の金を盗って隠したり、知人のところで食事をさせてもらうことが増える。Mo「Yの問題がひどくなり、胎教に悪いと思うとよけいイライラした。お灸をしたりして叱ったが効めがなかった。」(#23)、11月、ラマーズ法でRを出産する。出産時はsFとYが後で見ていた。Mo「その数日後に、Yが500円玉貯金を2万円盗って、近所の子と2人で分けて使っていた。退院してすぐに気付いた。産後でイライラしていたし、カッターとなり情けなかったし、Yに『あなたが渡した分を返してもらってきなさい』と叱った。Yが言いに行ったらその母親が怒鳴り込みに来た。その後も悪口を言われたりしている。」(#27)、12月、Yは学校へ行かなくなる。Mo「学校に行かせても飛び出して勝手にウロウロする。夜になっても帰宅しない。学校からは、制服を着た子がウロウロするから困る、最終的には学校に来させないで下さいと言われた。家でも深夜に出ていく。玄関の鍵を空けて行くから用心が悪いと叱ると、トイレの窓から出て繁華街をうろついていた。祖母(母方)のところへ行きたがるので、冬休みに預けた。」(#30)、「近所の人が私のことを継母やと思って、主人に奥さん又Yくんをいじめてはったと告げ口したりしていた。」(#3)、「主人は『もっともっとYを庇ってやりたかったけど、お前と喧嘩して別れるようになるのは嫌だったから、庇えなかった』と言ってます。私の方はもう気が変になってました。Yを捜すために電話をかけまくってやっと見つけて、1週間もしないうちに又、捜し回らないかんかった。」(#30)

## 考 察

### 1. 問題行動の発現の時期と子どもにかかるストレス

Yが様々な問題を表出することによって、児童相談所を経て情短施設への入所が決まったのであるが、問題行動の発現した時期に、どのようなストレスがYにかかっていたかを数え上げてみる。①引越しをする。②小学校入学。③姓の変更(就学と同時にしている)。④担任の先生に叱られ続ける。⑤妊娠を知った母親が非常に不安定になる。⑥母方祖母は入院し、助けてくれる人がいない。

①から④は、新しい環境への適応にかかわるものであるが、そうしたストレスに耐え乗り超えるための親の保護が極めて薄かった。母親は妊娠を知ってY以上に不安定になっており、Yにとっては保護してもらおうどころかこの母親の圧力の矢面に立たされていたのである。この母親の不安の内容は、『次の子が生まれればYがぐ

れる。不良になる』である。ところがこの時期の Y の行動は母親の不安に一致し、それを証明するようなものであり、増々母親をイラ立たせ不安を増幅させるものとなった。このような見方は、単に乳幼児期からの母子関係の未成熟を指摘するに留まらず、今現在の子どもと家族の状況を正確に認識するのに重要である。Holmes, T. H. 以来ストレスを評価する試みは<sup>78)</sup>、いろいろなされてきたが、子どもを取り巻く家族全体にかかるストレスの存在をより明確に可視的に把握しようとするのが、家族システム論の考え方に連がるのである。

## 2. Genogram (家系図) からみた家族パターンの多世代伝承 (Multigenerational transmission)

三世代以上の家族メンバーを含む家系図を作成し、それを用いて家族システムの様々なパターンを明らかにすることが、問題行動や症状を生み出した家族内の相互の人間関係を明確にし、問題や症状がその家族にどんな意味をもつかを推測することが出来る<sup>91)</sup>。その中で最も解かり易いものが家族パターンの多世代伝承と言われるものである。Y の家系図からその特徴を述べる。

家出が三代に渡っている。A 家の祖父は、家の後継ぎを嫌って大阪に出てきている。長男 (伯父) も家出をし、Mo も計 7 回は家出したという。そして Y の問題行動の中心は、家出徘徊である。世代を下るに従ってその年齢が早くなっている。C 家の長男は、大学の途中で家出をするが、戻ってきて次男と共に家業を継いでいる。C 家は家出を問題にせず受け入れる家系と考えられる。さて、家出と密接に関連するのが後継ぎの問題である。Mo の話では A 家の祖父は末子でありながら、兄達が家業の後継ぎを次々と嫌がったため、祖父が後継ぎにされた。祖父は、1 回目の離婚と同時に家を出て O 市に来たということである。長男が祖父との確執から自営業の後継ぎを嫌って高校 3 年で家出をした。そのため長女である Mo が後継ぎとして期待され、高校 1 年の時に東京に単身派遣される。Mo の家出の契機である。C 家の後継ぎは、A 家とは全く異っている。sF は自由に育てられたと意識しており、継がされたという被害的な感情は見られない。祖母が経理を統括し、兄弟平等の給与にしているのも特徴である。A 家と C 家の対象的なあり方を考える時に、Mo の再婚の意味についての仮説を述べる事が出来る。Mo が婚姻届を出した時、Mo には子連れ再婚という負い目に加えて、C 家の価値観に合わせるために相当のストレスを感じていたと思われる。R を妊娠することは、C 家の嫁としての立場を自覚させられることでもある。Y がそういう自分の立場を解ろうとせず問題を起す。ところがそれによって Mo は、自身が背負ってきた A 家の問題に直面させられるのである。入所治療で母親面接を受けることで、結果的には A 家の家族システムが変化し、新しい核家族を獲得することが出来たと考えられる。C との再婚は、A 家の多世代伝承のパターンを変える契機となったのである。C (sF) は、Y と R の 2 人の子どもに自分の後継ぎを継がすことは考えていない。Y が行きたければ大学に進学してもいいと言う。ただ R が Y を兄として立てるような兄弟になって欲しいと力説する。C 自身の兄弟関係の仲の良さを、Y と R にも期待している。入所後 1 年で Y の退院を強く求める気持ちにも表われている。

## 3. Triangle (三角関係) における Fusion (融合) と Generational boundary (世代境界)

Bowen. M. は家族内のサブシステムとして Triangle のあり方を重視している<sup>96)</sup>。つまり二者関係で生じる緊張や不満を、不満度の高い者が第三者を巻き込み、その第三者との間に融合した関係を結ぶことで、緊張や不満を解消しようとする。こうした三角関係が家族システムの中でいくつも出来上がる。融合した一辺を形成する 2 者は、頂点に位置する人物に対して情緒的切断 (Emotional cut off) と言われる態度をとりがちである。融合関係が夫婦や兄弟という同じ世代の間で生じるならば、家族に大きな問題を生じないが、親と子、祖父母と孫のように世代境界 (Generational boundary) を越えて形成される時、様々な問題や症状を出じるという理論である。

Y の拡大家族の家系図 (Fig.1) から考えると、祖母、Mo、Y の三角関係には、世代境界を越えて祖母 ≡ Y という融合関係がある。Mo が Y との連がりを求めることは、Y からすれば祖母との関係を脅かされることになる。次に、祖父、祖母、Mo の三角関係にも祖父 ≡ Mo という強い融合関係がある。Mo の「私の人生、理想、希望通りには行かなかった。父から逃げるため、私の人生を狂わせたのはお父さん」「でもその父には何も言えなくて、私を庇ってくれなかった母を攻撃してしまう。」(#31) との言葉に表現されている。父と娘の融合の強さと夫婦関係の疎遠さである。祖父母は以前から情緒的離婚 (Emotional divorce) の状態にあったと考えられる。この祖父は、息子にも、孫達にも情緒的切断の関係を続けているが、おそらく自身の原家族や 2 回の離婚による前妻や娘に対しても同様であろう。C 家の家族システムは、A 家のように融合と情緒的切断をめぐる三角関係によるものではなく互いの自立を認める、ほどよく分化した関係と言える。ここに言う自立とは、物理的空間的

に離れていることを意味しない。個人が自由意思を発揮しつつ、しかも互いに情緒的交流を行えることである。A家に頻発した家出は自立のように見えるが、それは融合関係に飲み込まれないように物理的距離をとったり、情緒的切断をしているにすぎない。家出をして原家族との関係を切断した人を、我々は決して“自立した人間”とは呼ばない。原家族との情緒的切断は、自身の核家族において新たな融合と情緒的切断を生み出すことになる。

振り返るとこのMoが、17才でBと同棲しYを妊娠したのは、Mo「赤ちゃんを持てば、父から独立出来る」という祖父との融合関係を切断する動きであり、それは生まれてくるYとの強い一体感（融合関係）を求める動きでもあった。再婚によるRの妊娠にも同じパターンが生じた。『新しく生まれる子との一体感を感じれば、Yとの関係を切ることになる。』これはMoの「次の子を生めばYがひがむ、Yが不良になると思った」という言葉の裏側に潜むMo自身の心の動きのパターンと言える。

#### 4. 入所治療の面接過程における変化

Yが入所治療をうけるという事象は、こうした家族システムの延長線上にある。治療期間を通じてどのような変化が見られたのかを概観する。母親面接でMo自身の生育史を語りながら、Moは家を出ようとした自分とYが同じであるということに気付く。そして今、現在も「祖母に甘えたい気持が一杯あって、主人やYの前でも祖母に膝枕してもらった」程に、Yが祖母を慕い祖母に甘えるのを見ると嫉妬を感じる自分である。Yとの間で祖母の取り合いをする。同時にYが自分を母親と認めるような感情を向けないことにも極めて不満である。Yが家庭より、施設の方がいいと感じているのではないかと思うとさらに腹立たしい。入所施設は子どもにとって、家族や学校の圧力から解放されて安心の出来る場であり、自己成長のための一時的な『うち』となりうる。しかし、週末外泊を重ねる間に、又院内の集団生活の中で自由に動けるようになればなる程、より自由な外の世界へ、より個別的な愛情関係を得ることの出来る家庭を求める。子どもにとって本当の『うち』は家庭の方だという思いが強くなる。一方Mo自身はRを自分の手で育てることで母親としての喜びと苦勞を初めて実感している。それはYの時には経験出来なかったものであり、母親失格・悪い母親の自己像を修正する体験でもある。Yが祖母ではなく、自分を必要とし自分を求めているとも実感出来るようになる。乳幼児期からYとの接触の少なかったMoは、現実のYよりも自分の理想の子ども像にYを合わせようとしていたのである。

#### 5. 退所の問題と最後のエピソード

退所をいつにするかは非常に難しい問題である。外来治療システムのない情短施設では、退所の決定に慎重にならざるを得ない。退所要求は、入所一年後にsFaから出された。Yを弟のRと同じように育てたい、RがYのことを兄と思わなくなると困るという理由である。職員の意見は、個人心理治療はまだ深まっていない、Yの施設内の友達関係から見て地域の学校集団への適応は困難が予測される、来所時に見られるMoの態度に母性的印象を受けないという点に集約される。夏休みの長期外泊の様子を見て2学期に退院を考えるという結論にsFaは納得した。しかし、Mo自身は退院が決まらなかったことで落胆した気持ちがあったことを2学期に述べている。治療者は、Moにとっての被害者感情『自分が望んだことは、いつも叶えられない』が再現するかと思った。しかし『Yを返してもらえない』という葛藤にMoが陥ることはなかった。それは4で述べたMo自身の母親としての自信に支えられていたとも言える。さらに重要なことは、MoとsFaの夫婦の関係がより安定し分化したものになったため、MoはRにもYにも融合した結びつきを求める必要がなくなったことである。Yの入所治療は、Moが始めて世代境界の明確な家族をつくり、その成員としての役割を果たすことを可能にした。A家にとっての変化は、祖母が退院して祖父と共に住み、祖父が『おじいちゃん』として孫のRを抱きあやすようになり、Moの妹が結婚したことである。祖父と長男の不仲は改善されていないが、祖父母の関係がさらに安定すれば、祖母が長男を陰で特別に可愛いがることも少なくなり（祖母≒長男の融合関係があるのだが）、いづれ変化するであろう。これまでMo自身は祖父の支配の下に、長男や妹そして祖母と祖父の間に気を配って調節役をするという、親役代理の子ども（Parental child）の役割をも果たしてきた。親役代理の子どもは、子どもとしての成長を犠牲にするという意味で、家族システムの歪みの影響を最も受け易い立場である。一般に、夫婦の絆が安定するということは配偶者の一方が、上や下の世代つまり祖父母や子どもとの間に強い融合関係を作らなくてすむことである。子どもは子ども、親は親という世代境界が引かれることが家族システム論による家族療法の目的であり、健康な家族の指標でもある。

最後に、退院前にMoの語ったエピソードを紹介して考察を終える。夏休み前にRを自転車に乗せて面接に

(本 多)

来る途中、自転車に乗ったある婦人と「接触するかしないか」でその婦人が転倒し骨折して入院した。その結果治療費や慰謝料をしつこく請求されることになる。それが退所前の2学期中続いた。Moは「絶対自分が悪くない、悪くないのに50万円も払うのは納得出来ない」と主張し続けたが、sFaに「50万円で片がつくならそれでよいではないか、お前がどうしてもそう言い張って、俺の言うことに従えないなら離婚するしかない」と言われる。そこでやっとMoは「離婚なんて、なんとあほらしいことや、自分が強情を張るのがいかんや」と気付いたと言う。Mo自身の生育史の出来事は、Moにとって「絶対に自分が悪くない」と主張したいものであり、Moには被害者はいつも自分という強い被害者意識がつくられていた。自分が生んだYだから決して自分を裏切らないと思っていたのに、Yは自分を裏切っただけに過ぎない。そういう被害感に満たされていたから、Yが母親の愛情を求めていることに気づかなかったのである。

慰謝料問題が解決したMoに、治療者は上記のような話をした。Mo自身はもう決して被害者でなくsFaに大切に思われ、新しい家族をつくることの出来る母親になられたことを伝えて最後の面接とした。

## 結 語

入所治療を必要とするような『家庭ではもうやれない』と判断される子どもを外来治療し、並行母親面接をすることは極めて難しい。そこで本稿に示すような入所治療の意義が認められるのであるが、入所治療においても母親面接が難しいのは同様である。自分が子どもを見捨てた悪い母親であるという罪責感と自分を悪い母親にさせた子どもへの怒りという母親自身の葛藤はなかなか解消されない。大井<sup>9)</sup>は、親の治療について詳説し「子どもの問題を家族全体の問題としてとらえねばならず、治療に最も参加しやすい母親を通して家族全体に働きかけることが実際である。」と述べているが、家族全体の問題としてどうとらえるのかの問題に答えていない。精神分析的な精神療法に準じた接近をおこなう慶応グループの乾は<sup>10)</sup>「親役割に対する教育的・育成的働きかけ、過度の治療的退行の予防、現実指向的対応」と言うように技法修正を重ねる必要性を強調し、患児の治療を支持する父母「面接」であって、父母個人の歪んだ心性や、その内面に注目する個人中心的な接し方にならないようにと述べている。これらの視点は、いずれも個人療法からの応用、修正という面からの接近であり、家族全体をどう見るかという積極的な姿勢に欠ける。この意味においても家族システム論の母親面接への応用は、極めて有用であり、転移状況に巻き込まれない、客観的で中立的な治療を可能にすると考えられる。

・付記、事例研究における個有名詞等はすべて匿名化し、内容についても支障のない範囲で修正を加え、個人の福祉が損われることのないように留意している。

## 文 献

- 1) 情緒障害児短期治療施設臨床技術開発研究班, 情緒障害児短期治療施設の心理療法・生活指導の実際, 資生堂社会福祉事業財団, (1981).
- 2) 全国情短協議会, 杉山信作編, 子どもの心を育てる生活, 星和書店, (1990).
- 3) 山中康裕, 杉山信作, 個別精神療法と環境療法の対比および集団生活の力動, 『入院治療2』, 星和書店, (1983).
- 4) 石川元, 松本真理子, 家族研究・家族療法用語事典, 『家族療法の理論と実際I』, 星和書店, (1986).
- 5) 遊佐安一郎, 家族療法入門, 星和書店, p.97, (1984).
- 6) Bowen. M, Family Therapy in Clinical Practice. Aronson, N. Y. (1978).
- 7) Holmes, T. H., The social readjustment rating scale. *Journal of Dsychosomatic Reseach*. vol. 11, pp. 203~218, (1960).
- 8) 野村, 久保木, 末松, 新しいストレス評価質問紙法の研究, 心身医療, vol. 1 No.2, pp. 93~103, (1989).
- 9) 大井正己, 親の治療, 『治療関係の成立と展開』, p. 202. 星和書店, (1981).
- 10) 乾吉佑, 私の行なっている家族とのかかわり, 『家族療法の理論と実際I』, p. 124, 星和書店, (1986).
- 11) McGoldrick M., Gerson R., Genograms in Family Assessment, Norton (1985)(石川他訳, ジェノグラムのはなし, 東京図書, (1988).